

## 編集室から

令和元年、明けましておめでとうございます！

さて、21世紀に入ってから創めたアスリックニュースも今月号は、貴重な号となりました。通巻としては221号になるのですが、発行が平成31年4月で、号としては令和元年5月。つまり、平成年代最後の発行・令和年代初号ということになるからです。

平成時代、少なくともこの国の周囲で戦争が起きず、元号の顕すとおり平時が続いたことは、本当に良かったと思います。一方で、経済情勢や技術的な動静は激烈を極め、これらの環境は大きく変わりました。

特に、家電を始めとする様々な機器がインターネットにつながり自主的に相互通信を行って動作を調整するIoT、数々の劇的な問題解決を実現するAI（人工知能）、人間に代わって永続的に正確な動作を繰り返せるロボット技術は、多くの職場を劇的に変えていく可能性があります。医療の診察でさえ、AIに代わるといわれているのは、衝撃的です。

これらの力が発揮できる社会に変わるためには、法制度がついていけず、それが制約条件となりそうです。これを打破するには、国会議員と官僚機構が、これらの変革に対してどれだけ深い認識ができるのか？が、問われます。これに乗り遅れると経済・産業的にはかなり国際競争に不利になるかも知れません。

それだけでなく、多くの企業・産業・業界で経営者・労働者を問わず、劇的に職場環境を変えていく覚悟と決断も問われます。

産業革命にも匹敵すると思われる大変革に、麗しく（令）、対応（和）することができるのか。私たち自身の問題だと思えます。

元号は平成から令和に変わりましたが、引き続きよろしくお願いいたします。（は）



の  
と  
だ  
ら  
ぼ  
ち

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川畠さんが「能登だらぼち」を引き受けて改装開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

のと だらぼち  
03-5537-3078  
17:00～23:00 日曜祝休

中央区銀座8-4-27  
プラザ銀座ビル地下1階  
(銀座外堀通りasics前)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2019/05  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167  
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217  
Fax 076-233-7375  
Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2019/05  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

## 泉 月



石川県白山市にて  
by hama

前回から糖尿病の話に入りました。糖尿病は、血中の糖が高くなる病気です。血中の糖は全て単糖類であるブドウ糖です。前にも述べましたが、砂糖はブドウ糖と果糖が結合した二糖類です。砂糖が吸収される時にブドウ糖と果糖に分解されますが、果糖は体内に入ると即座に脂肪酸やブドウ糖に作り変えられます。つまり単純に、砂糖が血液に溶けていると考えても大丈夫です。

血糖の正常値は、だいたい百です。では、その単位をご存知でしょうか？答は百mg/dL、つまり血液1dL(デシリットル)あたりに砂糖が百mg溶けているという意味です。イメージは湧きますか？1dLとは、中学の頃に実験で使った小さい方のビーカーです。ちなみに大きい方のビーカーが、十倍の1L(リットル)です。判り易くするため十倍にして血液1Lあたりにすると、百mgの十倍で千mgの砂糖になります。千mgとは、1gのことです。血液1L、つまり牛乳パック一杯分の血液に溶けている砂糖が1gという意味です。



この数字、皆さんはどう思われますか？スティックシュガーは、特に細いものが3gで、太いのは5gか10gです。その五分の一から十分の一が牛乳パック一杯分の血液に溶けて、それだけをエネルギーにして、我々は考えたり走ったり相

撲をとったりしているわけです。知れば知るほど、我々の体は効率よく精巧に作られているものだと驚ろかされます。

成人の血液量は、だいたい五Lです。血液は血管の中を流れています。水分やミネラルやブドウ糖などは血管の外に漏れ出て細胞を潤しています。これを組織液といいます。血液と違って赤血球が含まれないので透明ですが、その他の成分は血液とほぼ同じです。例えば花粉症の鼻水が尽きないのも飲水しなくても水様下痢が止まらないのも、鼻水や下痢がこの組織液から作られているためです。この組織液にも、1Lあたり1gの砂糖が溶けています。この組織液は、血液量の三倍あまり、約十五Lもあります。人間の体内では、血液プラス組織液が約二十Lあって、その中に二十gの砂糖が溶けているわけです。

飲んで甘いと感じる飲料、例えば普通の缶コーヒーには一本あたり十〜二十g、微糖でも一本あたり三〜八gの砂糖が入っています(一本二百mLだから、砂糖の濃度は血液の十五〜百倍になります)。缶コーヒーを一本飲むと、液体は胃に留まる事なく一気に小腸に流れ込み血液中へと吸収されていきます。元々砂糖が二十gしかない血液と組織液に、腸から吸収された二十gが一気に加わると何が起きるのか。次回は、その説明をします。小錦と岩田投手に辿り着くのは、まだ先になりそうです。



【プロフィール】  
（いがき としお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とつても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松でヌクヌクしています。

## 濱の起業塾 一 『立志』

令和元年初月号である今月から「社会事業を興す起業活動」についての連載を始めたい。

仕事柄、色々な地域から、さまざまな社会事業のお手伝いについてご相談を頂戴する。そんなとき、この事業は上手く行きそうであるか、そうでないかが、比較的早い段階で分かることがある。お手伝いの難易度によって、こちらの体制も変わるから、お引き受けを決めるためには、それが見極められている必要があるのだが、これが一筋縄ではないかない。

見極めの糸口は、「ビジョンと人」だと考えている。ビジョンとは、「その地域をどうしたいか、どうなりたいか」である。この深さ・志の高さの程度、別な言い方をすれば、深堀の加減が重要である。この時点で、あまり検討がされずに方法論だけが前に出てきてしまっている場合は、起業活動の中途で紆余曲折しやすい。

方法論は、分かりやすく具体的だ。それ故、目を奪われやすい。が、肝心なのは、地上の花ではなく、地下の根である。根がしっかりとっりしていれば、花は咲く。根が浅ければ、枯れやすい。表に現れた目に付きやすい事は、かりに意識が向いているようでは、嵐に吹き飛ばされる。より厄介なのが「人」である。起業現場の責任者・担

当となる方の人柄、これがかなり大きい。柔軟な考え方や表裏の無い誠実さ。多くの重要な資質の中から敢えて上げれば、この二点は特に重要だと思う。加えて、首長など最終的な意思決定権を持たれる方の人柄と、現場との信頼関係も、相当なウエイトを占めている。

行政が関わらない民間事業の場合、首長・担当を起業家に置き換えて頂きたい。そして、同じようにビジョンの深さ・人柄と周囲との関係性が、起業活動の成否を握っている。

個人が起業を志す場合、その動機はさまざまだろう。この土地で暮らしたい。お金を稼ぎたい。も勿論、素直で問題は無いと思う。ややこしいのは「有名になりたい」場合で、この動機がコンプレックスから来ている、それを自分で気づいていない場合だ。起業が成功して有名になれるかどうかは、結果次第である。

スポーツにおいても、起死回生の場面で、満塁サヨナラホームランが求められる際、ほんとうにそれを実現させる選手は、結果を狙っては居ないという。その一球一球に全神経を集中させ、身体は瞬時に動けるようにリラックスさせておく。いわゆる「ゾーン・フロー状態」に入っている。

禅問答的な表現になって恐縮だが、結果を出せる人は、結果にフォーカスしてはいないのである。

1グループの規模は、4~6人が有効に機能する人数だと考えている。参加者から見ると、このくらいが一つのテーブルを囲み、お互いの顔が見え人となりを知り、模造紙等の共同作品を仕上げるのにちょうど良いサイズである。限られた時間内でチームとしての一体感を醸成するとともに、全員で発表することが可能な人数でもある。コーディネート側から見ても、一人一人の個性やグループ内での立ち位置に気を配りつつ、柔軟に対処することができる最適な人数だと考える。

2、3人だと、一人一人の個性が色濃く出る分、グループ構成やタイムテーブルなどに、4~6人規模のグループとは別の作法が求められる。個人ワークをベースに検討を進め、ペアワークのような手法の一部に取り込んで内容の充実を図るようなことも考えられる。

やむを得ず10人以上のグループを組むこともある。大人数の参加者が一堂に会し、会場の都合でグループ数に限界があったことや、すべてのグループに発表の機会を与える必要があり、時間の都合でグループ数を増やせなかったことなど。多すぎる人数の場合、構成メンバーがほぼ満遍なく議論することは不可能に近く、どんなにうまくいったとしても必ず1、2人は発言機会が少なくなり、最悪の場合、参加意欲の低下や疎外感を味わうことにもなりかねない。できればこのようなグループ規模は避け、どんなに多くても8人に収めたい。

全体人数が同じ場合、グループ人数とグループ数のバランスが重要となる。24人を4人×6チームに分けるか、6人×4チームに分けるかは、かなり大きな違いである。参加者の属性と、時間、空間の制約、そしてそもそものグループワークの目的を勘案し、決めることになる。グループ人数が多くなるほど、個別具体的なお題を出したり、各グループの議論に積極的に介入し、ヒントや質問を投げかけたりして、出来るだけメンバー全員が発言しやすいような雰囲気最初を作るようにしている。逆にグループ数が多くなるほど、全グループの進捗を俯瞰することに神経を使うこととなる。

実は4月から東京都某区の区立小学校のPTA会長を務めております。自宅がある町会に入って祭りをしたかっただけの男が、まわりまわっているんなご縁があり、やらせていただくことになりました。

PTA活動という最近では保護者の負担が重く、PTA組織自体を廃止した学校も増えてきております。PTAの成り立ちは、GHQによる民主化教育の普及などと言われていますが、これだけ長く続いた背景には、当時の日本の主婦において数少ない社会活動の接点であったからと思われれます。しかし、昨今は女性の多くが働くようになり、かつ企業の福利厚生充実と増加しない可処分所得状況が相まって結婚後・出産後も働く女性が格段と増えました。少子化にも関わらず保育園が不足しているのはこのような原因があります。また結婚後に職場を離れても、ネットを介したコミュニティなどの普及によって女性は社会との接点を失うことがなくなりました。しかしそれが結果PTAの主役であった女性にとってPTAが単なる「負担」と感じるようになってしまったことで現在のPTA廃止といった動きが出ているのかと考えられます。

ではそもそも現在のPTAに求められる役割とは何でしょうか？私の娘が通う小学校では「子どもが安心・安全に暮らせる学校および地域環境づくりの支援」とあります。例えば、ここ数年地域内での不審者情報がほぼ毎日のように流れてきます。子どもを不審者から守るという観点において考えると、労働負荷が毎年高まりつつあり学校の先生や地域のボランティアのおじいちゃん、おばあちゃんだけに子どもが毎日安全に登下校ができる環境づくりの部分を依存してしまうのは正直不安です。かと言って個々の家庭の事情(働き方やスタイルなど)から、それを個々の家庭が責任をもってというのも偏りが出てしまいます。そうなると保護者が連携して見守るというPTAという機能が必要になるわけです。

ここで問題になるのが、「全員参加」「平等負担」「伝統踏襲」です。本来は有志の集まりであるはずのPTAがいつの間にか加入が義務となり、義務となると私は毎回出席しているのに、〇〇さんは全く来ない。という話が必ず出てくる。そして、その活動自体がかかる負荷に対して期待した効果が見られないにも関わらず、改善されることもなく毎年伝統行事のように行われる。なため、意識が高い保護者の方もストレスがたまり、PTA(役員)に対して期待を持たなくなり活動から遠ざかる。そのような悪循環が毎年繰り返されるのです。

僕が会長になったからといって、どこまで変えられるか？というのもあります。が、せっかくご縁があってさせていただくことになったのだから、少なからず保護者が毎日安心して子供を送り出せる地域づくりをいろんな人を巻き込んでチャレンジしてみたいと考えています。来年の今頃にまたいいご報告ができればいいなと。

通訳してくれていたヒョウさんは家の側に店が無いこともあって店には行かず、スマホから注文、宅配とのこと。我が小山町でも買い物難民の高齢者を対象に「タブレットから注文を」にチャレンジする企画があるが、さてどうなるか。



「消費者の暮らしすべてをデータにする」とダニエル・チャンCEOは言う。アリババが単なるネット通販企業の枠を超え、生活の基盤を提供する企業になりつつあるからだ。暮らしの隅々にスマホ決済を導入し、消費者の行動や購買データを収集する。データが集まるほど予測精度は増し、最適なタイミングで消費者が望む商品やサービスを提案できる。当然、アリババには広告やコミッションの形で収益が還元される。アリババは中国人の暮らしをデータに変え、成長の源としているのだ。



アリババの次に向かったのがCFMOTOというバイクメーカーだ。20年前に上海に来たときに自転車集団、人民服を目にした。10年前に来たときにクラクションを耳にし、振り返ると音もなくバイクガイドを近づいていた。この時、すでにエンジン音、排ガスのあるバイクは無かった。当然、ここでも電動バイクを作っているものと思っていたら、展示のバイクは大型、マフラーもタンクもある。ガソリンエンジンのバイクじゃないか、しかもカマキリ顔の斬新なデザインの。中国では販売できない



から、専ら輸出用とのこと、ただ国内の白バイはこの会社で作っているとのこと。ホンダ、ヤマハ、スズキ発祥の地浜松出身の小生はショックを受けた。日本の企業はゼロから相当に長い年月をかけて世界に冠たるバイクを生み出してきた。にも関わらず、ここには最先端のデザインのバイクが中国製として堂々と生産・展示されている。乗って見ないと何とも言えないが、見た目、日本製と同一レベルに感じる。技術に垣根無し、プロセスも短縮できる現実を見せつけられた。

実は、バイクのデザインはオーストリアのKiska Design。KiskaはオーストリアのバイクメーカーKTMのデザインを担ってる会社。このKTMがCFMOTOと組むことで中国市場へ、CFMOTOは欧州市場を狙うと言うものだ。

20年前、県職先輩からボーダレス、グローバルと聞かされ、何じゃそれ？と思ったことが、ここ中国で見せつけられる。KTMとの関係はあるが、会社案内のエンジニアは日本語堪能、日本で身につけた技術持ち帰っただろうなと容易に想像できる。電腦だってアメリカから相当持ち帰っている。その事を政策的にやっているんだろうな、ランプ大統領が怒るのもわかる。

さらに進むと中国が知的生産も世界一なるのかしらと思わせる視察の現場であった。(おしまい)

